もくじ

P4 蘇我馬子（そがのうまこ） VS 物部守屋（もののべのもりや） P5

P6 蘇我入鹿（そがのいるか） VS 中大兄皇子（なかのおおえのおうじ） P7

P8 大海人皇子（おおあまのおうじ） VS 大友皇子（おおとものおうじ） P9

P10 鸕野讃良皇女（うののさららのひめみこ）（持統天皇（じとうてんのう）） VS 額田王（ぬかたのおおきみ） P11

P12 坂上田村麻呂（さかのうえのたむらまろ） VS 阿弖流為（あてるい） P13

歴史人物ライバル対決Q&A
飛鳥（あすか）時代～平安時代
P14～P15

P16 称徳（孝謙）天皇（しょうとく（こうけん）てんのう） VS 藤原仲麻呂（ふじわらのなかまろ） P17

P18 藤原良房（ふじわらのよしふさ） VS 伴善男（とものよしお） P19

P20 菅原道真（すがわらのみちざね） VS 藤原時平（ふじわらのときひら） P21

P22 藤原道長（ふじわらのみちなが） VS 藤原伊周（ふじわらのこれちか） P23

P24 清少納言（せいしょうなごん） VS 紫式部（むらさきしきぶ） P25

P26 崇徳上皇（すとくじょうこう） VS 後白河天皇（ごしらかわてんのう） P27

歴史人物ライバル対決
平安時代のクセの強い人物
P28～P29

蘇我馬子

ヤマトを世界と肩をならべる国に

仏教についての議論は、馬子の父蘇我稲目の時代からの課題でした。仏像と経典が百済から朝廷にもたらされ、欽明天皇は「日本も仏教を取り入れてはどうか」と臣下たちに意見を求めます。蘇我氏は賛成ですが、物部氏は反対します。合議の結果、天皇は「蘇我氏が私的に信仰するならよい」と蘇我稲目に仏像を渡します。仏教をめぐる蘇我と物部の対立は、このときからはじまっていました。

蘇我馬子は飛鳥時代の豪族蘇我氏の当主。敏達天皇から推古天皇まで4代の天皇に仕えました。天皇は、この時代にはまだ『大王』と呼ばれていました。有力な豪族たちが大王を支える合議制で政治がおこなわれており、大王の権力は絶対ではなかったのです。蘇我氏は事物の管理、財政などを担っていた一族と考えられています。技術者集団も管理していたようです。当時の技術者は渡来人も多く、馬子の周りには国際色豊かな雰囲気があったのかもしれません。その頃、仏教を国家として取り入れるかの議論が起こります。馬子は取り入れるべきと主張します。当時の仏教とは、建築や工芸技術、薬草等の医学的な知識も含めた、総合的な文化を伝える場所でもあったのです。海外との交流が盛んになると、人々の交流も増えます。馬子は新しい文化を取り入れることが重要だと考えていたようです。

物部守屋

外来勢力はヤマトのバランスを崩す

敏達天皇の葬儀の際、物部守屋と蘇我馬子は、順番に哀悼の言葉を述べました。小柄な馬子が大きい刀を持つ姿を見て、守屋は「矢で射られた雀のようだ」と嘲弄します。次に守屋が声を震わせて読むと「体に鈴をつければよく鳴るだろう」と馬子が言い返しました。そこから二人は深く憎み合い、お互いを滅ぼす機会を狙っていたと「日本書記」は語ります。馬子の推した用明天皇が大王となると、守屋は穴穂部皇子(敏達の弟)を支持し、対立を深め、やがて「丁未の乱」へとつながっていきます。

物部守屋は神話の時代から大王に仕え、支えてきた豪族物部氏の当主。物部氏は鉄の生産、武器の製造など大王の軍事を担っていたと考えられています。軍事の他に中臣氏とともに神事も担当していたともいわれます。守屋は安易に外来の神である「仏」を信じ、手厚く国家に迎えることは、日本古来の神々をないがしろにすることになるのではないかと考えます。また、反対すべきもうひとつの理由として、当時の外交問題がありました。東アジアの中で日本はまだ弱小国です。百済とは友好関係ですが、新羅や高句麗が日本をどう思っているかはわかりません。日本は仏教とともにやってくる外来勢力を受け入れるには、まだ国力が十分でないと考えていたのかもしれません。

蘇我入鹿（そがのいるか）

敵をつくりすぎた秀才

青少年期の入鹿は、遣隋使だった南淵請安や僧旻の塾で学んでいたそうです。後に入鹿の敵となる中臣鎌足も同じ塾に通っており、ともに秀才として評判を得ていました。入鹿殺害の企ての中心となった中大兄皇子も、唐から帰国した留学生たちから多くを学んでいたそうです。歴史に「もし」はありませんが、入鹿と鎌足、中大兄皇子が一堂に会して、政治のあり方について、親しく議論を交わしていたら、飛鳥時代の歴史は大きく変わっていたかもしれません。

飛鳥時代の豪族、蘇我蝦夷の長男。推古天皇時代に活躍した蘇我馬子の孫にあたります。

皇極天皇が即位すると、父蝦夷に代わって国政を担当しました。「日本書紀」によると大臣となった入鹿は、皇極天皇の信頼を利用して自分勝手なふるまいが多かったと書かれています。入鹿は蘇我氏という有力な氏族に生まれたため、他の豪族たちの考えや心の動きに注意を払わず、自分の才能だけを信じて行動していたようです。入鹿は、気づかないうちに敵をつくりすぎていました。入鹿は、「乙巳の変」で皇極天皇の玉座の前で殺害されます。そのとき、入鹿は天皇に向けて無実を叫びました。

「臣、罪を知らず。乞ふ垂審察へ」（わたしに、なんの罪がありましょうか。）

入鹿の死を知った蝦夷は、戦うことなく自害します。蘇我本家はここで滅亡しました。

中大兄皇子（なかのおおえのおうじ）

敵を排除していく孤高の天才

順調に政治を進めていったように見える中大兄皇子ですが、大きな打撃を受けたことがありました。友好国である百済からの要請で派遣した軍が唐と新羅の連合軍に大敗北をしたのです（663年「白村江」の戦い）。唐と新羅の連合軍が日本に攻めてくるかもしれません。彼は各地に防衛のための城を築くなどの対策を実行します。天皇即位後は日本は、遅れた政治制度だと考え、改革を進めていきます。初の戸籍をつくり、役所での文書による政治などを徹底します。

中大兄皇子のちの天智天皇。舒明天皇と皇極天皇の間に生まれた皇子。父の死後、天皇となった母を支え、政治に携わっていきます。中大兄皇子には、次の天皇になるのは自分だという強い思いがあり、その自信を持つに値する十分な才能と鋭い知識があったようです。蘇我蝦夷・入鹿父子を政治の場から失脚させるため、蘇我氏に反発する同志を秘かに集めます。秀才中臣鎌足と出合い、２人は蘇我氏を排除する計画を練ります。乙巳の変で、入鹿を殺害。蘇我本家は滅亡します。中大兄皇子はすぐ天皇にはならず、皇太子のままで大化改新を進めていきます。かつての協力者や皇族であっても容赦はしませんでした。乙巳の変から23年後、中大兄皇子は即位し、天智天皇となります。彼の周囲に最後まで信頼できた人物は多くはいなかったようです。天才の孤独といってもいいかもしれません。